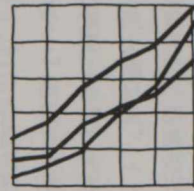


経済学

カナダ経済の構造的特質

飯澤英昭



私がカナダ経済を研究の対象に選んだそもそものきっかけは、一橋大学の山澤逸平教授の示唆に負うところが大きい。

当時、外国貿易とくに輸出の経済発展に果す役割を分析するうえで、カナダがひとつのユニークな事例を提供しているように思われた。以来、カナダを輸出主導型発展モデルの実証に用いるという視角からはなれて、カナダ経済を史的にフォローしていくうちに、次第にカナダ経済に固有の構造的特質なるものに強い興味と関心を抱くようになった。

その関心事のひとつはこうである。経済の発展過程で、カナダが意識的に採用し続けてきた外資（企業の所有と支配を招く直接投資）への寛容な態度と、それに伴う産業の広範囲にわたる外資支配を許容しながらそれをテコにして工業国家の建設を進めてきたカナダの工業化政策は、ほぼ同時期に工業化へのスタートをきった日本の、外資に対する堅固な閉鎖的態度と比べてとき、きわだった対照を示しているといった点である。今日、カナダが行き過ぎた外資支配からの脱却を

はかろうとしていているのに対し、その間、着実に国際競争力をつけた日本が外資に對し門戸を開く方向に動いているという事実は、両国がそれぞれ正反対の極から出発しながらも、共に自律的なよりバランスのとれた国民経済の形成を志向していることを示している興味深い。

ところで、こうした生産要素の国際的開放度に関する両国の異なった対応の仕方は、一体何に起因するのであろうか。

それは、究極的には生産要素の賦存状態といった客観的条件の相違に求められるべきであらうか。あるいは、すぐれて主體的な意味において、両国の国民国家形成の歴史的経緯の相違に求められるべきであらうか。

私は、最近、こうした設問に接近するための基礎的作業として、カナダ国内のアカデミックな世界に存在する生産要素の国際的開放度に関するさまざまな考え——大きくは、完全開放を唱えるコンチネンタリストそれに対峙するナショナルリストの二大集団に分類されよう——のよって立つ論理構造とその系譜の分析を進めるところである。

私は、こうしたカナダ研究を通して、「国民国家」とか「国民経済」あるいは「ナショナルリズム」とかいった概念の具体をあらためて問い直す必要があると考えており、また同時に、単一民族国家日本が、今後国際社会で協業していくうえで、カナダの示す事例から多くの教訓を学びとりうるものと確信している。

（山形大学助教授）

海洋開発

望まれる技術交流

小林 浩



● 氷海開発のバイオニア

先進諸国で海洋開発が提唱されてからすでに十余年となるが、その中で最も発展した分野のひとつに海洋石油開発がある。

海洋からの石油生産は、すでに石油全体の主要な割合を占めているし、建設サイドからの海洋開発もかなりの部分が石油に関連したものになっている。

このように、石油開発のフロンティア・エリアは海洋へ進展し、それが更に深海域へ、また氷海へと拡大されてきているのが現状である。

すでに、カナダの北極海沿岸海域においては、長期の見通しのもとに莫大な投資をして、氷海の石油開発が進められている。今世紀末か来世紀初めには大海洋油田地帯となるとも言われており、氷海開発のバイオニアの息の長い計画には驚嘆せざるを得ない。

昨年、北極海（ボフフォート海）の石油探掘現場を見学した際、広大な氷原に立って考えたことは、人跡未踏の地で石油開発を推進する彼等の原動力は何であ

らうかということであった。勿論、近年の石油事情の緊迫傾向に對する彼等の先見性もあるが、それに加えて、新しいことに本能的に立ち向かっていく彼等のバイオニア精神であらう、と思ったのである。

● 氷海技術

氷海における石油開発では、過酷な自然環境条件下での施設建設・操業が要求される。

カナダでは設計施工上、あるいは操業上の創意工夫、技術開発などが行なわれ、これを克服してきた。これには全く敬服する。わが国では従来はあまり注目されなかつた氷海の石油開発、そして建設サイドからすれば、そのための氷海技術、海洋構造物の研究開発であるが、現在その必要性が痛感されつつある。

カナダにおける氷海技術は現実の石油開発の仕事を通して、学界、産業界に浸透し、裾野の広さを示している。わが国のカナダ研究の重要な分野である。

● 技術交流

「実践に裏付けされたカナダの氷海技術と、日本の各分野の技術との互恵の交流が望まれる。技術交流は単なる商取引に終わってはならず、技術を使用、育成し、成果を両国で享受するものでありたい。」これは、昨年カナダを訪問した際のカナダのお役所の方の昼食会でのスピーチであるが、わが国のカナダ研究推進のポイントであると思っている。（清水建設（株）研究所海洋研究部主席研究員）

